

# 島根における乳幼児の実態（第5報）

——はじめて子を持つ親の育児相談について——

大久保 英 子・落 合 益 世

（保健研究室）

The Actual Condition of Infants and Young  
Children in Shimane (Part 5)  
Child Cares Conference to Parents:  
How to Take Care of the First Child

Hideko OKUBO ・ Masuyo OCHIAI

## 1. はじめに

厚生省では、昭和36年度より全国で3才児一斉健康検診を開始し、幼児に対する保健指導を積極化してきた。その結果、心身ともにいろいろな問題が発見され、島根県でも昭和48年以来文部省から依託研究をうけ、全県下の“初めての子が3才児になった家庭”を対象に、育児指導を行なっている。

本調査は、島根県教育委員会で行った育児指導のうち、保健領域の「はがき通信」に併せ、育児上相談したいことを自由に記入された資料から、その問題点を探るため検討を試みたので報告する。

## 2. 調査対象及び方法

はじめての子が3才児になった（昭和44年4月2日～昭和45年4月1日までに出生したもの）親に対して行った。回答数 1,276名で、回収率33.7%、そのうち育児相談のあったものは 591名である。調査方法は、昭和48年6月「はがきアンケート」方式によって行われた保健領域のけがの調査に併せ、日ごろ悩んでいること、不安に思っていることなどを自由に記入するように求め、教育委員会より配布、回収が行われたものである。

## 3. 調査成績および考察

回答者 1,276名中、不安悩みの相談をうったえたもの 591名（市部580名、郡部321名）（男478名、女423名）延 901例について、その内容を発育、健康、生活習慣、性格、行動、情緒、教育、要望などに分け整理し検討し

た。市部のうち53.7%、郡部のうち37.5%に相談があり全般に市部に多かった。

### (1) 発育・健康

発育では、表Iのように身長体重についての不安がもっとも多く、77例中55例までを占めており、なかでもこがらで体重がふえないという悩みが多く、肥りすぎも6例（うち市部が5例）あった。乳児期のきわめて盛んな発育が、幼児になると緩慢になり、思春期の発育開始までもむしろ年間増加量は停滞してくる年齢であり、四肢の伸びがよくなり、乳児期に比べからだが細くなってきた印象を与えること、すなわち、幼児期の体型に近づいたことをやせたと思ひ、体重の増加量に変動があることが理解されていないようだ。

また、標準体重にとらわれ、同じ年齢でも幅があること、3才のはじめと終りでは、かなりの相違のあることは当然で、十分理解されていないことがうかがわれた。

寝汗の相談が11例もあったが、乳幼児は体表面積がひろく、新陳代謝もさかんであるため、発汗量は大人より<sup>1)</sup>大きく季節差の少ないのが特徴的である。また、小林は夜間睡眠時の発汗は、成人では疾病と関連している場合が多いといわれているが、小児では生理的現象であるとしており知識の不足からの不安がうかがわれる。

扁桃腺炎は24例もあり市部、女児に多かった。

風邪をひきやすい、せきをするというのは71例にも達しており、そのうち55例までは市部であり、都市部の戸外での遊び場の不足、親の過保護の状態がうかがわれた。どもりが12例もあり注目される。これは、2才～4才に

かけてことばの発達する時期に集中しておこりやすく、ことに環境、母親の養育態度が関係し、心理的な緊張や不安を与えていることにありといわれており、母親教育の必要性がうかがえた。

むし歯に対する関心も強く、49例もあった。乳歯う歯は、はえかわるということで軽視されてきており、その質問もあった。著者らの研究<sup>2)</sup>でも、永久歯う歯の多いものは、乳歯う歯も多いという結果がでており、3才児検診でも乳歯についてのチェックや保健指導は一応行なわれているものの、乳歯を守るには、既に20本生え揃っている3才児では遅すぎる。乳児時代から甘党にせぬようにするために妊娠した時からしっかりした心構えを持たなければならない。ききわけのない乳幼児の歯を根本的に治療してもらうことは、きわめて困難で予防が大切であり、むし歯予防に対する先き廻りの教育の必要が痛感される。相談例のなかには、湿しん、扁桃炎、中耳炎、はな血、ひきつけ、腹痛、リウマチ、先天性心疾患など、疾病異常を考えさせられるものもかなり含まれており、医師の診断治療、周到な継続観察を要するものなどがある。また、難聴などは少数例であるが、このまま放置されていると知育に大きく禍根を残すことにもなるので、急がねばならない。

また、以上の相談を成長と発達、健康状態、疾病と異常に分けてみると成長と発達では市部で14.2%、郡部で11.6%、健康状態ではそれぞれ22.1%、15.7%、疾病異常では19.9%、21.9%で市部では发育健康上の相談が多く、郡部では疾病に対する相談が多く医療や相談がうけにくいことがうかがわれた。全般的に市部に相談が多く育児熱心な母親のようすもうかがえた。

## I 発 育 健 康

	市	郡	男	女	計
成 長 発 育					
体重がふえない	12	6	13	5	18
こがら	11	6	9	8	17
やせすぎ	7	3	5	5	10
つまづいてよくころぶ	5	3	7	1	8
ふとりすぎ	5	1	4	2	6
体重がすくない	3	2	3	2	5
足腰が弱い	4	1	3	2	5
身長が低い	2	1	2	1	3
背丈がのびない	2	0	2	0	2
お腹が大きい	2	0	1	1	2
動作がのろい	0	1	0	1	1

	市	郡	男	女	計
皮 膚					
湿 疹	5	8	6	7	13
寝汗がでる	8	3	6	5	11
虫さされ	6	3	5	4	9
ストロフルス	5	1	2	4	6
汗かき	2	0	2	0	2
おでき	2	0	0	2	2
口のまわりがあれ	2	0	2	0	2
じんましん	1	1	0	2	2
アトピー皮膚炎	1	0	0	1	1
皮膚がただれる	1	0	1	0	1
あ ざ	1	0	1	0	1
皮膚がかさかさする	0	1	0	1	1
イ ボ	0	1	0	1	1
背中がかゆい	1	0	1	0	1
手足の爪がそり返っている	0	1	0	1	1
種痘のあとが腫れてかゆい	1	0	0	1	1
髪の毛が赤くて黒くならない	1	0	1	0	1
顔の列傷	1	0	0	1	1
眼					
テレビを近くで見る	1	2	0	3	3
斜 視	2	0	2	0	2
結膜炎	1	1	1	1	2
体の調子が悪いと眼脂がでる	0	1	1	0	1
遠 視	1	0	1	0	1
左眼の動きがにぶい	1	0	1	0	1
フリクテン	0	1	1	0	1
眼の白いところが青い	0	1	0	1	1
耳 鼻 咽 喉					
扁桃腺炎	16	8	9	15	24
鼻血を出す	9	10	11	8	19
中耳炎	2	4	4	2	6
鼻汁が出る	4	1	4	1	5
鼻づまり	2	0	2	0	2
風邪をひくと耳が痛くなる	1	0	0	1	1
蓄膿症	1	0	1	0	1
耳かくの上が下に垂れている	0	1	1	0	1
消 化 器					
吐 気	6	2	1	7	8
腹 痛	6	2	3	5	8

	市	郡	男	女	計
寄生虫がいるようだ	2	1	1	2	3
よだれが出る	2	0	2	0	2
吐きやすい	2	0	2	0	2
自家中毒	0	2	0	2	2
息がくさい	1	0	1	0	1
肝 炎	0	1	1	0	1
呼 吸 器					
風邪をひきやすい	43	13	33	23	56
咳をする	12	3	9	6	15
ぜんそく	7	6	8	5	13
気管が弱い	3	4	4	3	7
痰がつまる	2	0	2	0	2
風邪が治りにくい	0	1	0	1	1
熱が出ると声がかれる	1	0	0	1	1
風邪をひくと声がかれる	1	0	0	1	1
循 環 器					
先天性心疾患	0	2	0	2	2
心雑音に対する検診の必要性	1	0	1	0	1
言 語 聴 能					
どもり	6	6	7	5	12
難 聴	2	0	1	1	2
発音をはっきりしない	1	1	1	1	2
言語数が少ない	1	0	1	0	1
脳 神 経					
ひきつけをおこす	3	2	1	4	5
乗りものによろ	0	1	0	1	1
骨 関 節					
脱 臼	4	2	1	5	6
親指がまがっている	1	1	0	2	2
頭の形がいびつである	1	0	1	0	1
X 脚	1	0	1	0	1
口 腔 歯 牙					
むし歯	29	20	22	27	49
不正咬合	2	1	0	3	3
むし歯と永久歯との関係	3	0	1	2	3
歯の悪いのは遺伝か	2	0	0	2	2
歯みがきは何時頃からはじめたらよいか	2	0	0	2	2

	市	郡	男	女	計
歯が1本生えてこない	0	1	1	0	1
歯間にすき間がある	1	0	0	1	1
フッ素はどこで塗ってもらえばよいか	0	1	1	0	1
予防接種及び薬					
ツベルクリンの陽転時の注意	6	0	2	4	6
予防接種の反応が心配	2	1	2	1	3
日本脳炎の予防接種の年齢は何才からか	1	0	0	1	1
体質改善の注射に副作用があるか	1	0	1	0	1
扁桃腺の下熱剤服用で体への影響	0	1	0	1	1
〃 長期服用の影響	0	1	0	1	1
種痘を受けていない	2	5	5	2	7
そ の 他					
アレルギー体質	11	6	8	9	17
顔色が悪い	6	6	9	3	12
熱がよく出る	8	0	2	6	8
ヘルニヤ	3	3	2	4	6
足が痛い	3	0	1	2	3
抵抗力がない	2	0	2	0	2
ハシカの予防にワクチンをした方がよいか	2	0	1	1	2
お尻がかゆい	1	0	0	1	1
リウマチ熱	1	0	1	0	1
子供のかかり易い病気は何か	1	0	1	0	1
団体生活をはじめた場合病気をもらいやすいのではないか	0	1	1	0	1
交通事故の不安	2	3	5	0	5
路上に自転車の放置	0	1	0	1	1
シーソーの危険	1	0	0	1	1
水の事故	1	0	0	1	1
食品公害	2	0	0	2	2

## (2) 生活習慣

表IIのように、食事、排泄、睡眠、その他の項目に分類した。そのうち、もっとも問題が多いのは**食事**に関するもので、相談の7割以上を占めており、なかでも偏食がもっとも多く70例、ついで食餌量が少い、食欲不振、食事が不規則でむら食いとなっている、幼児の偏食に悩み、思うようにたくさん食べてくれず、てこずっている

親のようすがうかがわれた。偏食のおこりやすいのは、3才～4才ころといわれ、幼児の自我の発達により、嗜好が明確になるためであるといわれている。これは食物だけでなく、いろいろの面にでてくる発育過程である。また、食欲不振も2才半～3才にかけピークに達するものである。しかしその程度や種類はいろいろで、問題にしないでよいものもあるが、親の養育態度によっては困るほどの偏食習慣もついてくるので、予防が大切である。さらに、食事時間が不規則で、でたらめに食べるものが多く、食欲にむらがおこり、食欲不振や偏食の原因ともなるわけである。3才ごろに生活の自立ができるようになるので、まず、生活を規則的にするポイントとして、食事時間を決めることが大切であり、このことの認識を深める必要があるようだ。

排泄の問題では、夜尿が26例ともっとも多く、ついで尿意を知らさない、もらすとなっており、排尿はおおよそ2才ごろからやっとでる前に教えるようになり、2才半～3才で夜尿はなくなるというもののきわめて個人差があり、5才以上にならないと問題とはいえない。しかしわずかではあるが排尿頻度が高い、夜便所に行く回数が多いなどもあり情緒不安がうかがわれ、かなり多くの親たちの不安の材料となっていることがわかる。

睡眠では遅寝遅起、昼寝が少い、寝起きが悪い、睡眠時間が少ないなどであった。幼児の睡眠時間はどのくらい<sup>3)</sup>が適当かは、非常にむずかしい問題とされており、高橋の東京では、3才児最短は9時間30分、最長14時間と幅が広いが、大体1年ごとに30分～60分ぐらいつつ少なくなり、これは昼寝の時間が少なくなる。3才児では昼寝をしないものも26%もあり、時間も平均1時間5分であったと報告されている。また、2～5才の幼児では、ひとりばっちにされる淋しさと寝つかれないことが多いこともあり、睡眠時のうつぶせ態位も12才ごろになると自然になおるものである。一般に親自身の生活習慣の反省に併せ、幼児の実態の理解が必要と思われる。

つまり基本的生活習慣の自立が遅れているという悩みをもっているわけで、食事、排泄、睡眠面ともに、男児が多い。というのも、女児より男児に母親が甘くなり、ルーズになってしまい、その結果として悩みのたねとなっていることもうかがわれる。一方、幼児が生活習慣面でようやく自立ができるようになるものの、それぞれ個人差があり、一挙にまた一様になるものではないことの理解の不足から、不安をもっていることがうかがえた。

## II 生活習慣

	市	郡	男	女	合計
1. 食 事					
偏 食	35	34	43	26	69
食餌の量が少ない	25	10	13	22	35
食欲不振	15	8	12	11	23
食事が不規則である	10	2	12	0	12
むら食い	5	3	8	0	8
遊び食べ	5	0	3	2	5
流動物や水物を多くとる	0	3	1	2	3
食事時間が長い	0	2	1	1	2
食物をかまない	2	0	2	0	2
ごはんとおかずを別々に食べる	0	1	1	0	1
食事を家族と一諸にしない	1	0	1	0	1
箸を上手に使わない	0	1	0	1	1
食事が一人でできない	0	1	0	1	1
夜は食事をとらない	0	1	1	0	1
朝食をよるこんで食べない	0	1	1	0	1
哺乳瓶でミルクをのむ	1	0	0	1	1
2. 排 泄					
夜 尿	20	6	19	7	26
尿をもらす	3	5	7	1	8
尿意を知らせない	2	3	3	2	5
便 秘	4	0	3	1	4
夜むずかって起きず起きてもしない	1	1	1	1	2
夜、便所に行く回数が多い	0	1	1	0	1
排尿回数が多い	0	1	1	0	1
便意を知らせない	0	1	1	0	1
おしっこをがまんする	1	0	1	0	1
便をもらす	1	0	0	1	1
3. 睡 眠					
遅寝遅起	2	1	2	1	3
昼寝がすくない	2	1	2	1	3
寝起きがわるい	0	3	0	3	3
睡眠時間が少ない	0	2	1	1	2
夜、ぐずぐず言って寝ない	0	2	1	1	2
夜泣き	1	0	1	0	1
3才以上でも昼寝は必要かうつぶせ寝	1	0	1	0	1
寝返えりをうった時手足は冷えてもお腹さえ温めればよい	1	0	1	0	1

	市	郡	男	女	合計
4. その他					
洗髪をいやがる	0	1	1	0	1
遊具の後片付をしない	0	1	0	1	1
暑い時戸外で遊ばせるのは 何時間位か	1	0	0	1	1
合 計	140	96	146	90	236

## (3) 性格、情緒、行動、教育

相談は表Ⅲのように、例でその最も多いのは指しゃぶりで16例、ついで、いうことをきかない、医者をやがるがそれぞれ9例、内気8例等であった。

指しゃぶりのうち、3才以後なほ続くものについては、問題とされるもので、発生原因として、こどもの個人差や情緒的欲求を無視した機械的、画一的保育態度で育てられている場合、なんらかの形で欲求不満が現われるが、指しゃぶりもその一つと解されており、親とのつながりにおける愛情不満や、友人関係における不適応、非活動的な抑圧された生活環境など考える必要がある。また、いうことをきかない、反対のことをいうなど自我意識の発達過程におこる反抗期の出現に接し、親の期待過剰やこどもの精神発達の理解不足から、とまどい、悩んでいる状態がうかがわれた。

## Ⅲ 性格、情緒、行動、教育

	市	郡	男	女	合計
神経質な子	5	2	2	5	7
内 気	4	5	2	7	9
友達のところへ遊びに行く ことができない	3	1	3	1	4
近所の子供と仲良くできない	3	1	1	3	4
言うことをきかない	7	2	4	5	9
甘えっ子	3	2	2	3	5
反対のことを言う	0	2	1	1	2
遊びが自分中心でないと気 嫌が悪い	1	1	0	2	2
臆 病	1	2	1	2	3
言葉づかいが悪い	2	1	2	1	3
自 慰	2	1	0	3	3
歯ざしり	2	0	1	1	2
うそをつく	1	0	0	1	1
荒っぽい	1	0	0	1	1
わがまま、やんちゃ	4	1	4	1	5

	市	郡	男	女	合計
医者をやがる	5	4	5	4	9
父親をきらう	0	1	1	0	1
母親との離れが悪い	0	1	0	1	1
精神不安定	1	0	0	1	1
気まぐれ	1	0	0	1	1
けんかをする	1	0	0	1	1
犬に咬まれてから犬をこわ がる	1	0	1	0	1
指しゃぶり	10	6	6	10	16
爪かみ	4	0	2	2	4
落ち付きがない	2	2	1	3	4
左きき	5	1	6	0	6
母親のお乳にさわる	1	2	3	0	3
すぐ泣く	7	0	1	6	7
夜起きて泣く	3	0	1	2	3
夜のおしっこに起きると必 らず泣く	1	0	0	1	1
階段の昇降をいやがる	1	0	1	0	1
おもちゃを大切にしない	1	0	1	0	1
自分のことが自分でできない	1	0	1	0	1
下唇を吸う	0	1	1	0	1
咬みつく	0	1	0	1	1
土や石ころをなめる	1	0	1	0	1
人の耳をつまむ	0	1	0	1	1
哺乳瓶の乳首をくわえて寝る	0	2	0	2	2
毛布や布団の端をもって転 がる	1	0	0	1	1
生傷がたえない	1	0	0	1	1
年下の子をいじめる	1	0	0	1	1
パンツがぬれても言わない	1	0	0	1	1
でたらめの歌を歌う	1	0	0	1	1
字や数字を覚えられない	2	0	2	0	2
叱りすぎが性格に及ぼす影響	1	0	1	0	1
本に書いてあることと実行 がうまくできない	0	1	0	1	1
おけいこごとは4才からは じめてよいか	1	0	0	1	1
子供との接触が少ないこと の影響	1	0	1	0	1
まわりに友達がいない	2	1	1	2	3
保育所と幼稚園のちがいを 知る	0	1	1	0	1
合 計	97	46	61	82	143

#### (4) 要 望

要望として、日曜祭日の休日診療対策を望んでおり、ことに市部で遊び場、歩道橋の設置、小児専門の歯科医、検尿を保育所ではほしいなどがあり、郡部では専門医や検診の機会にはずれた場合の対策、テレビがはいらないなどの要望があった。

#### 4. おわりに

島根県下全域にわたって行われた“はじめて子を持つ親”のはがき通信による育児相談は 901例であった。その主なものは偏食、食餌量が少い(104例) 風邪をひき易い(56) 身長・体重がふえない(53) むし歯(49) 夜尿(26)、扁桃腺炎(24)、食欲不振(23) はなし(19) アレルギー体質(17) 指しゃぶり(16) 汗かき、ね汗(13) しっしん(13) ぜんそく(13) どもり(12)などであった。

一般に都市部の相談が多く関心の強さがうかがえ、発育や疾病の予防的な悩みが多かったがなかには保育所で検尿をして欲しいという積極的な意見もみられた。一方、郡部では医療機関に恵まれないためか、治療を必要とするような疾病に対する相談の割合が高く、医療施設の充実、相談の継続指導が望まれる。

最近の親は、育児書やマスコミ等による情報でその知識はかなりあるように思はれるが、極めて初歩的で実際の育児内容にも自信がなく、迷い、とらわれからノイローゼとなってう親が出てきている現状を浮彫りにし

ていた。もっと定期的な健康診断を受けるよう母親の意識の高揚と先き廻りの指導が望ましい。

また近年、家庭は核家族化し、近隣とは孤立化がすすみ、身近かなところに経験者がなく相談相手がいないことも一因であるから、中学校、高等学校の女子教育や、母親学級の中で、幼稚園、保育所、乳児院で実習の体験を持つような計画を、さらに、病院において病児の見学、出来れば実習をし、健康な子供でもいかに個人差があるか、また小児疾病の理解を深めておくような機会をとり入れられ地についた教育をなされることが望まれる。

本調査は島根県教育委員会で行われた育児相談を整理検討したものであり、資料作成にあたり、遠藤陽子、佐野千恵、未富史恵諸姉の協力を深謝します。

#### 5. 文 献

- 1) 小林収：小児保健研究 21 116p (1962)
- 2) 中川一郎他：小児生理学 朝倉書店 18p (1958)
- 3) 鈴木栄：育児相談のために 金原出版 214p (1973)
- 4) 船川幡夫、高橋種昭他：三才児 医学書院44p(1967)
- 5) 木村隆夫、大久保英子：臨床小児医学 12 31p (1964)
- 6) 森 彪：小児保健研究 31 30p (1973)
- 7) 船川幡夫、平井信義他：乳幼児健康診査の実際  
医学書院 96p (1969)
- 8) 糸賀宜三、中鉢不二郎：育児学新書 金芳堂  
158p (1968)